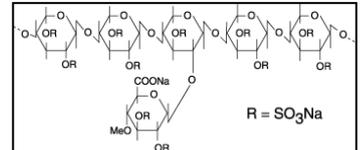


プリオン病に対する体内埋め込み型微量注入器具を用いたPPS脳室内持続投与療法の報告および、福岡・佐賀地区のGSS家系研究

研究分担者：福岡大学医学部神経内科 坪井義夫

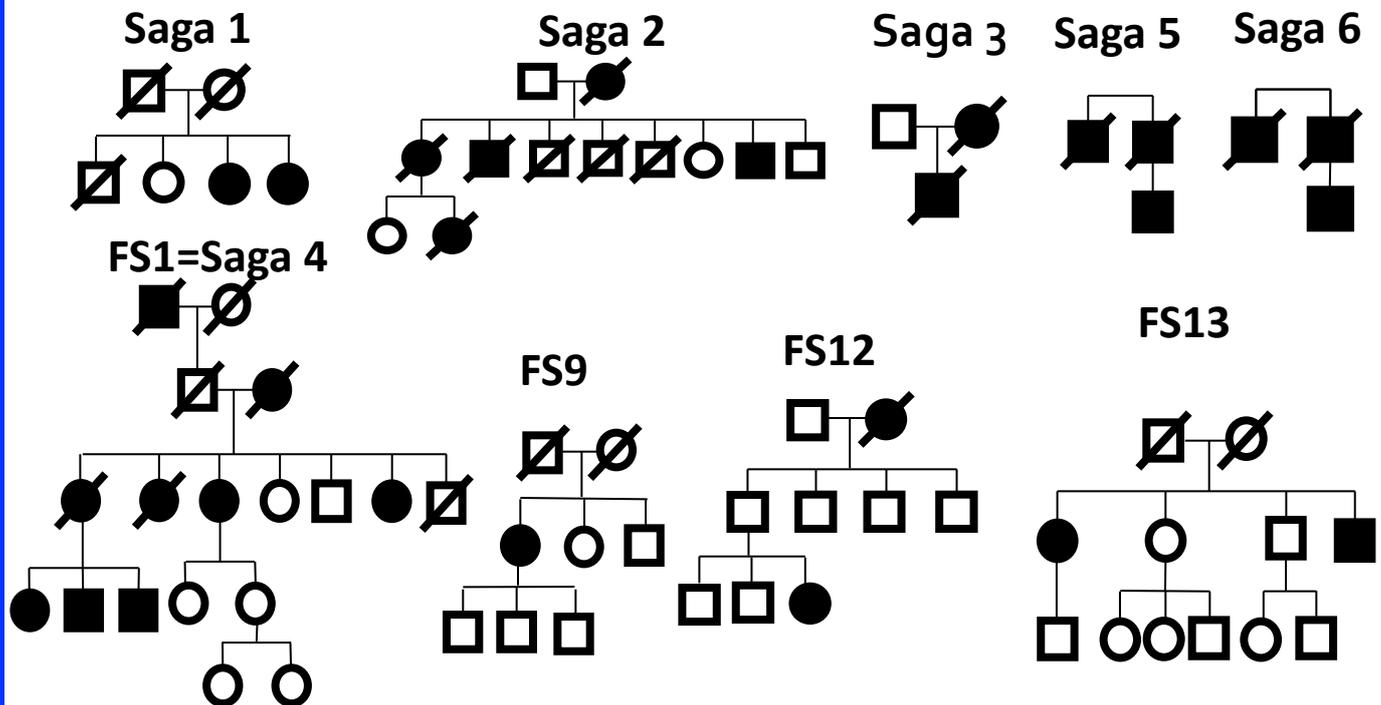
1. ペントサンポリサルフェート(PPS)脳室内投与法の結果(継続)

結果：11例のプリオン病患者に対して同療法を施行。治療開始からの経過は平均33(4~80)ヶ月で、11例中10例が死亡。周術期の問題はなく、CT上全例に硬膜下水腫が出現した。経過中、血算、生化学、凝固能の異常は認められなかった。



2. 福岡-佐賀地区に集積するGSS家系の臨床的特徴と発症素因家族の研究

福岡-佐賀地区にGerstmann-Sträussler-Scheinker病(GSS)が少なくとも20家系存在し、発症者は31例で、サーベイランスで確認された71例中実にその44%に当たる。現在その臨床症候と発症素因(at risk)家族は34例確認した。



解説

1. プリオン病に対するペントサンポリサルフェート脳室内持続投与療法の継続報告を行った。2004~2007年までに11例に同治療を施行し、5例において術後2年以上の長期生存があり、うち1例はまだ治療継続中である。
2. 福岡-佐賀地区にGSS家系が集積することが判明し、調査報告を行った。